

現代韓国社会における火葬と「孝」の理念

中村八重

はじめに

韓国社会を考察するにおいて、儒教の影響を抜きにして語ることはできない。儒教の理念は広く生活の中に息づいて、生活全般にわたって守るべき規範としての機能を保ってきた。なかでも「孝」は現在においても韓国人の個人の行動の規範になり、最も人間関係を規定する原理として機能している。

「孝」は世代間の序列を裏付ける規範として、韓国人の家族親族関係の規範や村落社会の秩序維持に作用してきた（本田、1993：143）のである。

このような儒教の理念がもっとも如実に表されているのが祖先崇拜である。儒教理念としての「孝」は生前の父母への孝を死後の父母へ延長したものとされている。父母の死後は、誠意を尽くして葬儀を行い、埋葬したあと一定の祭祀を行なうことが、子としての親に対する「孝」の実践である。この精神に基づいてつくられた墓は、祖先崇拜の重要な要素であり「孝」のシンボルである。

儒教が導入された朝鮮時代には火葬は禁止され、その後圧倒的に土葬¹が主流になった。現在でも墓制の中心は土葬で、韓国のあちこちでお椀を伏せた形の墓を見ることができる。火葬にすると散骨し、墓を造らないのがこれまでの通例であったため、火葬は正式な葬法とは考えられていなかったようである。火葬にすることは、墓を造り祭祀を行なう「孝」の理念には反することになり、火葬への抵抗は強いものがあつた。

ところが、ここ近年韓国では火葬が増加してきている。全国の火葬率は、1971年に7.2%、1981年に13.4%、1991年には17.8%だったのが、1999年には30.7%に達している²。ソウル市では、1999年に43%、2000年8月の時点で50%を越えている（韓国経済、2000年8月17日）。

火葬増加の背景には、人口増加や都市化による土地問題、核家族化による

墓の管理の問題等々、現代社会の抱える問題が大きく関連している。これらの社会問題に対する解決策の一つとして、人々の火葬への関心は高まりつつある。

火葬は韓国では理想的には不孝と考えられていて、否定的イメージを持っているにも関わらず、なぜ受け入れられているのだろうか。韓国では昨今の社会問題への方策として火葬の受容を余儀なくされていることもさることながら、韓国社会に火葬を受け入れる素地があったからこそ、受容が始まっているということができるだろう。土地不足などに起因する問題が火葬増加の要因のうち、誘因とするならば素地とは素因として考えられる。

本稿では、韓国社会に深く浸透している「孝」理念に反するよう見える形にも関わらず、火葬が増加している理由、すなわち火葬増加の素因的側面を明らかにすることを試みる。今日増加しつつある火葬は、遺体を燃やした後の遺骨を散骨するだけではなく、納骨堂や新型の墓に納めるといった、従来とは違う方法での遺骨の処理法が多く採用されて普及しつつあるという側面もある。このことは「孝」を実践するにおいて、土葬が不可欠ではないことを示すものではないか。以下、祖先祭祀の概略と火葬の現状を把握し、墓の機能を祖先と子孫、子孫と他者関係に注目して考察していく。そして、理想的には土葬であるべき遺体処理法が、火葬へと移行する過程において、「孝」にどのような解釈がされていくかにも注目していく。

一. 祖先になる一死の儀礼から祖先祭祀まで

韓国における死に際しての儀礼と死者が祖先となつてからの祭祀儀礼は、おおよそ儒教式に行なわれる。儒教式の一定の儀礼はテキスト化された細かい手順にそって行なわれる。朱子の著作とされる『朱子家礼』にもとづいてつくられた葬礼や、祭礼の際のテキストとなっている『四礼便覧』がその役割を果たしている。

葬礼の手順は、初終、襲、小斂、大斂、成服、吊喪、聞喪、治葬、遷柩、發引、及墓、反哭、虞祭、卒哭、祔祭、小祥、大祥、凶祭、吉祭の19段階からなる(張、1995:150-164)。大まかには、「初終(チョジョン)」で臨終が確認されるとさい復という魂呼びにあたる儀礼がされた後、霊座など

さまざまな葬儀の準備がされる。次に「襲斂(スビョム)」で、遺体に経帷子が着せられて入棺される。喪主や遺族は親等数に即した、麻布でできた喪服を着用する。喪主は弔客を拝礼で出迎え、弔客は靈前で焼香・再拝をおこなう。その後遺体は喪輿で運ばれて墓地に向かい、地中に埋葬される。これが「治葬(チサン)」である。かつては身分によって出棺までの日数が決まっていたが、現在では3日が出棺が多いという。墓地は風水的に適地である「明堂(ミョンドン)」がよいとされる。葬儀後、一年目に小祥、満二年に大祥が行なわれて、死者は祖先となって祭祀を受けることになる。

祖先祭祀も同様に儒教儀礼のマニュアルに沿って行なわれている。祭主から数えて四代祖までの祖先に対して、命日に各家庭で「忌祭(キジェ)」が行われ、旧暦8月15日の「秋夕(チュソク)」や旧正月である「ソルラル」などの名節には、各家庭で「茶礼(チャレ)」という祭祀と、「省墓(ソンミョ)」という墓参りを行なう。五代以上の祖先に対しては毎年一定の日に「門中(ムンジュン)」³単位で祖先の墓において「時享祭(シヒャンジェ)」(=「時祭(シジェ)」、「墓祭(ミョジェ)」)が行われる。墓の前で行なわれるので「墓祭」とか「墓祀(ミョサ)」と呼ばれる。

二. 火葬の現状について

(1) 火葬のイメージ

韓国では歴史的には、仏教文化の全盛期であった高麗時代、支配階級で火葬が行われていたことはあった。しかし、高麗末期に朱子学が輸入されて、土葬が禁止されることとなる。朝鮮時代に入って、儒教の国教化とともに、火葬は不二不孝の至りと非難されて土葬が一般に普及し(赤田、1975:199)、土葬が葬制の主流となる。火葬は「異常な」死の場合や、土葬をして墓を造る経済的余裕のない人々が選択することが多かったために、火葬に対するイメージは良くないものだった。火葬にすると骨は粉にして山や川・海などに散骨して墓を造らなかったので、火葬されることは少なかった。

日本植民地時代に『朝鮮の風水』を編んだ村山智順によると、火葬は①有徳の僧を葬る場合、②「悪疾者」を葬る場合、③祟りを押さえる方法として、④戦場での遺体処理法として用いられたという。①の僧を火葬にするときは

舍利が拾われる。②は火葬にするとハンセン病などの伝染病が子孫に伝わらないという信仰からきている。③の場合、父母の死体を普通に埋葬しても、子孫に災厄や病気が頻発するときに、吉地に改葬する経済力のない者が、死体を焼くことで子孫とのつながりを断絶してしまおうとするものであるという。④には火葬したあとの骨を故郷に持ち帰ることを目的にされていたという。いずれにしても火葬は一般には用いられなく、あくまで特殊な場合に行なわれた。死体を火葬するという行為は、死者と生者とのつながりを完全に断絶するものであった(村山、1931: 370-372)。

現代においても火葬のイメージはそれほど変わっていない。最近の新聞記事からは、①事故死した人が「火葬」にされる例(海外での飛行機事故の報道、火災事故、殺人等)、②殺人者が死体を「火葬」にしてしまった例、③自殺した人が、「火葬」にしてくれるように頼む遺言を残す、といったいくつかのパターンを見ることができる⁴。火葬という言葉は、否定的なイメージをもって使用されている。やはり、火葬は生者が死者とのつながりを断とうとするもの、あるいは死者の方から生者とのつながりを断とうとしているものと思われる。

(2) 火葬推奨運動における「孝」

1960年代から本格化した工業化は、「漢江の奇跡」と言われる経済成長をもたらした急激な人口増加が起こった。これにともない当然死者の数も増加し、墓地の面積も増加していくことになる。特に大都市への人口流入が顕著で、ソウル市には人口の4分の1が集中している。このような都市化による土地問題の深刻さは「生きて住宅難、死んでは幽宅(墓)難」といわれるほどである。1999年6月末現在で、韓国の総墳墓数は1998万基、墓地面積は国土の1%をしめる996k㎡で、毎年汝矣島の面積と同じ9k㎡が国土を侵食しているという(中央日報、1999年9月2日)。また、公共墓地は既に飽和状態であることも頻繁に新聞紙面などで言及される。その他には、手入れをされなくなった墓地、「無縁故墓地」の多さも問題となっている。全墳墓の約3分の1に当たる5,600万基が無縁故墓地と推定されるという(朝倉、1993: 65)。

このような現状に対処するため、これまで数度にわたって法律改正が行なわれてきた経緯があるが、実を結んでいたわけではなかった。近年の法律改正でようやく実効性をともなった改革が行なわれようとしている（韓国葬墓研究会、1998）。

近年になって、本格化した政策の強化と火葬推奨運動によって、徐々に火葬が増加の傾向にある。現在の火葬の普及には、行政の指導と支援にも増して、市民団体の活動の活発さによるところが大きいようである。このような団体の活動は、そのほとんどがソウル市や保健福祉部などの政策と連動したものである。ここでは2つの団体を紹介し、火葬推奨運動がどのように行なわれているかについて言及してみる。

生活改革実践汎国民協議会（生改協）という市民団体は、「家庭儀礼、環境、消費、文化など生活過程では行する諸般問題を汎国民として改善または改革するために個人および市民団体が共同で連帯して活動をする協議体」として1997年に創立された。火葬に関する活動を大きく分けると、市民に対しては意識改革を促し、行政に対しては墓に関する法律の整備や施設改善を働きかけること、そして葬業者に対して不正の是正を求めること3つである。市民への働きかけとして、世論調査と討論会がある。

筆者がインタビューした担当者は、火葬が広まらない理由を、「孝」という概念を使って説明した。親の遺体を火葬をすることを、子どもは親に対して申し訳のないことをすることと考えている。すなわち火葬は親に対しての不孝だと言うわけである。このような、火葬にすると不孝だという概念を支える固定観念を、むしろ火葬することが「孝」であるという認識に変えることを運動の大きな目標としているという。また、葬儀社の不正も「孝」と関わる問題だという。死者のために、高価で質の良い棺や「壽衣（スウイ）」という経帷子を買うのが、「孝」だと思ふ遺族の観念を利用して、偽物を高価で売りつけるのがその例である。さらに、火葬場の職員が遺族から、いくらかの「ノジャッドン（旅費＝袖の下のこと）」をもらうことを当然だと考えていることや、葬儀用車両の運転手がお金を要求するゼスチャーとして、わざと棺を下ろさないことなどの例も、「孝」を重んじる遺族の心理を利用したものと語った。

韓国葬儀文化改革汎国民協議会（葬改協）は、1998年9月に創立された団体である。主な活動は、「火葬遺言残し運動」である。火葬遺言の誓約書が製作されて、広く街頭などで署名を呼びかけている。火葬に対する認識を変えること、イメージの改善が主目的である。環境問題がもっとも重視されているようだが、火葬遺言運動の根底の思想は、親が火葬にする旨を遺言すれば、子供が抵抗なく火葬に出来るというところからきている。ここ数年間に各地で頻繁に行なわれたアンケートの結果⁵には、「自分は火葬にされても良いが、父母は火葬にしたくない」という意見が非常に多い。この思想は親が死ねば、埋葬にして墓を造ることが、子としての義務すなわち、「孝」である思想から来ている。子が自分の親を火葬にするのは「不孝」だと考え、火葬にすると親戚や周囲から非難を浴びることすらある。その点、親が火葬にして欲しいという遺言を残せば、子がそれに従うことが「孝」となるわけである。この運動は「孝」という観念を逆手に取った運動だと言える。

ここでは二つの団体の活動に触れたが、いずれも火葬への抵抗感をなくし、火葬を普及させる共通の目的がある。死者と生者の関係が立ちきられてしまうと考えられている火葬への抵抗は強いものがあるようである。火葬推奨運動は、遺言という親とのつながりを強調することで、断絶を起こさない形で火葬の普及をねらいとしている。韓国社会の中に根強く息づく「孝」の観念をとりこむことで、実際に火葬増加に効果を発揮しているといえるのではないか。

三. 墓の機能

(1) 子孫と祖先の関係

①「孝」の表現としての墓

韓国の祖先崇拜は本来的には「孝」の延長としての儒教式の祖先祭祀を指し、「孝」は生前の父母への「孝」を死後の父母や、祖先に拡大したものと認識されている。子は親に対して、親の「産み与えた恩」に対しては、子女を産んで「代を保つ」義務があり、「養育の恩」に対しては親を「奉養する」義務がある。そして「財産相続の恩」からは「祭祀」の義務を負うのである「孝」は子から親への絶対的な服従関係を表すもので、祖先崇拜は韓国の特徴的な

死者と生者の関係を表しているものである（崔、1992）。

「孝」の表現実体として、墓は非常に重要な役割を持っている。親が活着している間は、親を奉養することが第一に考えられ、親が死ぬばその遺体は土葬にして墓を造り、定期的な祭祀を行なうことが親に対する「孝」の実践であると考えられていたのである。

②風水と墓

しかし墓の造成と祭祀が全く「孝」の理念に則って行われているのではない。崔は「本来理念的には儒教においては祖先祭祀は、観念的には死者に対する追慕⁹と見て、祖先は信仰の対象ではなく、孝の対象であるはずである。しかしながら実際の韓国で行なわれている儀礼は、信仰儀礼に近い」（崔、1992：74-75）と述べている。祭祀を行なわないと子孫が不幸になったり、祭祀を行なうと祖先が栄華を与えたりすると考えられているが、これは祭祀は風水や仏教的儀礼と複合された信仰であって、単純な財産相続に対する報恩的追慕ではないことを示すものであるという。風水的に良い場所に墓を造ることは祖先から良い恩恵を受けようとする思想からきているものである。

風水は、宅地、墓地、都市村落の選地の選定基準として重要な役割を果たす。この中でも祖先崇拜と関連が深い墓地風水の基本精神は、遺骨を埋葬した土地の良し悪しにより、子孫に吉凶の影響関係があるということである。つまり祖先の骨が埋葬する土地の生氣を受けると、子孫は繁榮し、そうでなければ子孫に重大な凶事をもたらすという思想である。

赤田光男によると、韓国では新羅時代にすでに風水思想が伝来していたというが、墓地風水が優位を占めるようになったのは李朝時代からで、「儒教思想」とパラレルな関係で普及していったのだという。とりわけ、朱子学が輸入されてからは、『朱子家礼』をもとに父系始祖直系の長子孫による祖先祭祀が法的に規定され、宗中、門中などの家族制度の成立に重要な役割を担った。さらに墓制では、遺体を吉地に埋葬して、一族の繁榮を期そうとする風水信仰がもとになって土葬が一般的となったという（赤田、1975）。

崔は『朝鮮の風水』の分析によって、風水が子孫に与える影響の特徴を明らかにした。①生前の親への「孝」が風水とは直接関係のないこと、②父母の生前の管理よりも死後の管理が重要であること、③排他的な父系原理に所

応すること④父系血族の子孫の老若男女をよりわけずに所応すること、⑤良い影響は徐々におよぶが、悪い影響ははやくおよぶ、⑥所応の内容は子孫繁栄、富者、官吏になることである。①について、血肉関係（父子関係）が重要視されていることや、風水師に対する善行によって明堂を得た事例、嫁の場合嫁ぎ先に良い影響が行くことなどを提示し、死者の生前の善行も、怨念も関係なく、また、子孫の父母に対する「孝」が直接、風水に関係しないことをあきらかにしている。②については、死者の意思がほとんど反映されないことを示している。「風水は原則的に死ぬ瞬間から始まるものであるので、生前のことは問題視されない。したがって儒教において重要視される孝道や奉養なども風水と直接関係ない」（崔、1992：146）のである。

韓国の風水に対する信仰は、祖先崇拜の一部として強調され今日に至っている。子孫繁栄、社会的地位の向上、富裕な生活などを墓を通して実現しようとする韓国社会・文化の属性を表現しているものである。子孫は墓を通して子孫の意思を実現しようとする反映ということができよう。風水は子孫の幸福論を反映している（崔、1992：164）わけで、祭祀は生きている者についての孝道の延長であるが、風水は「孝」の概念が抜け落ちているのである。そこには祖先から子孫が一方的に利益を受けようという思想がみられる。

（2）子孫と他者の関係—威勢の誇示としての墓

5代以上の祖先に対して行なわれる「墓祭」には、家庭で行なわれる忌祭や茶礼よりも多くの供物が供えられ、1回の祭祀には経済力が必要なことが多い。また門中組織の構成員が一同に会し祖先を祀るので、それだけ組織としての吸引力が必要になる。

祖先に対する祭祀をすること自体は、「孝」表現でもあるが、同時に門中組織の紐帯を図るものでもあった。また、「墓祭」は、しばしば門中の威厳と「孝」の実践を周囲に対して顕示することが目的であることは既に指摘されている（ジャンネリ・任、1993：196）。すなわち、門中は祖先祭祀を顕示的目的として組織されるもの（嶋、1987：3）で、門中の威勢の誇示が墓祭の機能の一つである。また、祖先への「孝」の実践は、競合する氏族へ対しての、または同一氏族内での諸派間の地位の認知をめぐる現象である。つまり地位の主

張は族譜に示されるような、単に祖先が高名であったことだけではなく、他者の目の前で繰り上げられる儒教的規範の実践としての行為（時享祭や生活態度など）と、それに対する他者の認知が必要であるという（嶋、1987：19-20）。

近年は都市への人口の流出に伴って門中の組織化が難しくなっているが、集団としての門中集団はその機能が低下、あるいは弱体化しても、個人としての門中へのアイデンティティーは消滅するのではなく、むしろ余裕が生じれば自己のプレスティジを高めるために、自己の祖先、すなわち自己の帰属する門中を正当化しようとする理念が見られるという（朝倉、1993：72）。自門中の象徴として威信を誇るために祭祀を盛大に行ったり、金銭的に余裕のある人々の間では、祖先の墓を新しく建て直すといった現象がみられる。

このことは、土地不足問題の原因としての「豪華墓地」と関連がある。経済発展の過程で財力を蓄えた一部の富裕層によって新しく墓を建てる現象が多く見られる。風水的に良いといわれる「明堂」に広い土地をもとめ、莫大な費用をかけて碑石などを多く使って造った墓が「豪華墓地」である。これらが近年自然環境を破壊し土地不足を起こすとして社会的指弾を受けている（連合通信、1994：169-172）。このことが、現在の火葬増加の原動力のひとつでもあるのだが、豪華墓地は、「孝」の実践を外部へ対する威信の誇示として墓という形で表したものの、あるいは、威信の誇示を「孝」の実践というポーズでもって表したものとといえるのではないだろうか。

（3）墓という場

韓国社会で儒教理念として重要視されている「孝」は、祖先崇拜の脈絡では祭祀という形で表現され、その実践のためには墓の存在が必要である。しかし、墓は死者への追慕の表現としての「孝」の実践の場所であるのみならず、生者の幸福論を反映した風水思想の表出の場でもある。また、同時に他者への威信誇示の場としても機能するのである。墓とはこのような場所であるがゆえに、風水的に良いとされる場所に莫大な金をかけて豪華墓地が造られることがあるのであろう。しかし、近年は火葬にすることは社会的に良いこととされつつあり、いわゆる「社会指導層」と呼ばれる人々が率先して火

葬推奨運動に参加することが多いが、これも墓を通じた社会的地位の顕示をするものであるとも考えられるのではないだろうか。

いずれにせよ墓はそれぞれの機能を果たす場としての重要性を持つのであるが、では墓を作るのには何が必要であろうか。現在増加している火葬は、散骨といった骨を完全になくしてしまうやりかたよりも、骨を納骨堂に納める方法や、新しく開発された納骨式の「家族墓地⁷」を利用する傾向がある。このことは墓を造営することそのものが重要で、墓にとって必要不可欠なのが骨であることを示すといえるだろう。つまり「孝」であることの表明において墓は欠かせない存在であって、その墓を造るには骨さえあればいいということである。厳密に言えば、物質としての血や肉は必要ではないだろう。火葬にすると血と肉は失われてしまうが、散骨さえしなければ骨は残る。残った骨で墓を造ることができる。このことが「孝」と矛盾することなく火葬を受け入れることのできる理由のひとつではないだろうか。

おわりに

「孝」理念の実践という側面からみると、火葬遺言運動において看取できるような「孝」の利用は、「孝」の理念的内容が不変的であることが、「孝」の実現のされかたの柔軟性を支えていることを表すだろう。火葬にするようにという親が残した遺言を守ることが「孝」であるとする解釈が強調されることにおいて、プラクティスとしての「孝」は可変的でも、イデオロギーとしての「孝」は結果的には変わらない。遺体処理法が土葬から火葬へ変化しても、親の遺言に従うことや火葬後に墓を造るといったことで、「孝」であることを示すことは可能である。「孝」であることを示すことさえできれば、その範囲内で遺体処理法など、プラクティスとしての「孝」は変化してもよいのである。このようなわけで、現在の火葬においても「孝」が実現する。ゆえに、火葬の増加が起こっているのではないだろうか。「孝」の表明においては土葬が不可欠というわけではないのである。

「孝」は「美風良俗」といわれるが、現代韓国社会において火葬は今日的「美風良俗」として受け入れられつつあると考えることもできるだろう。しかしながら、未だに火葬への抵抗は強い。火葬普及には、火葬施設の整備や、

共同墓地の増設、火葬後に埋葬可能な納骨式墓地の開発なども、拍車をかけていることは重要である。本論は変化の渦中にある韓国社会の、火葬をめぐる現象の側面を取り上げたに過ぎず、今後は誘因となっている土地問題や変貌する葬制などについて詳細な調査が必要である。また火葬忌避の身体観、他界観についても研究を進める必要がある。

註

¹ 韓国語では土葬を指す言葉として「埋葬（メジャン）」が用いられ、土葬という言葉は一般に使用されない。「埋葬」は火葬などの処理をせずに、死体をそのまま土に埋める埋葬方法である。以下本稿では、韓国語の「埋葬」のことを指して土葬を用いる。

² 表 韓国の火葬率（単位％）

年度	1971	1972	1973	1974	1975	1976	1977	1978	1979	1980
火葬率	7.2	6.9	8.4	9.8	12.4	14.4	14.3	15.0	16.2	16.2

1981	1982	1983	1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990
13.7	13.5	13.9	14.4	16.6	15.8	16.9	16.2	17.9	17.5

1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999
17.8	18.4	19.1	20.5	22.0	/	22.9	27.7	30.7

（韓国葬墓研究会、1997：55・ハンギョレ新聞、1999年11月18日・韓国経済、2000年8月16日より筆者作成）

³ 祖先から受け継いだ姓と、始祖の住居地や出身地を表す本貫で表される同姓同本集団では、ある特定の高い官職についた人物や、入郷祖から分節した中始祖を頂点に門中が形成されることがある。門中の特徴は①祖先祭祀を行う、②共同の門中財産を有する、③門中成員は族譜に名前が記載される、④族譜の増改刊行事業などを行う、などである（崔仁宅、1998：215）。

⁴ 1997年から1999年の新聞記事分析による（中村八重（2000）「韓国社会の火葬に関する人類学的研究」修士論文）。火葬の推進が活発になる1998年

から 1999 年頃には、ある財閥の会長が遺言によって火葬にされたという出来事があり、また、祖先の墓が荒らされる事件が多発したことで、火葬推進の論調が新聞紙上に強く押し出されていた。

5 おもなアンケートを取り上げると次のようである。

・「葬墓文化に対する市民世論調査」1998 年 9 月（ソウル市民成人男女 500 人）

自分の火葬：賛成 66.8%、反対 33.2%

両親の火葬：賛成 30.4%、反対 69.6%（ソウル市、1999a・中央日報 1999 年 1 月 17 日、ハンギョレ新聞 1 月 18 日・韓国経済、1 月 18 日）

・韓国土地行政学会 1999 年 3 月（全国成人男女 2902 人）

本人・配偶者の火葬賛成 45%

父母死亡時：先山・個人墓地 54.5%、公園墓地 21.5%、公設墓地 12%、火葬 12%（ハンギョレ新聞、1999 年 3 月 10 日）

・（社）光州社会調査研究所「新千年全国民意調査」1999 年 12 月 18 日～23 日（全国 20～60 歳 1372 人）

火葬を望む 72.1%、埋葬を望む 17.3%

父母の火葬を望む 25.5%、埋葬を望む 42.5%（ハンギョレ新聞、2000 年 1 月 6 日・中央日報、2000 年 1 月 10 日）

・ソウル市で初めて「韓国型家族墓地」（註 7 参照）が初分譲されたときに申請者を対象に行なったアンケートでは自分が納骨されたい 73.2%、父母を納骨したい 8.8%という結果が出ている。ここにも自分の火葬は許容できても、両親の火葬には抵抗感があることがうかがわれる（韓国葬墓研究会、1997：31）。

6 祖先崇拜には出自制度と結びついた、「公的」なものと、家単位の個人単位で行なわれる最近の死者に関わるものとを区別する主張がある。フリードマンは祖先祭祀の概念規定に関して、祖先祭祀を家庭祭祀に主眼を置く追憶主義と区別しているが、明確に記述していない。本田洋は「祖先崇拜と追慕・記念は死に対する生者の働きかけのあり方の異なる二つの側面であり、前者

が、親族集団の結束の要となるような祖先に対して、子孫が集団的に義務として行なうような、規範によって規定される構造化した奉仕である反面、追慕は私的な思い出や記憶の残る死者に対して生者が個人的かつ主体的に行なう、多分に情緒的で必ずしも構造化されていないような追慕、記念の行為であるといえる」と述べて、「従来<祖先崇拜>の性格の強調されることの多かった<チェサ>もこの種の<追慕・記念>の側面を見出すことは可能」(本田、1993: 143) だとしている。

⁷ 家族墓地とは、外形は土葬の場合の墳墓に似せて作られ、内部に何代にも渡って火葬した後の遺骨を納骨できるように設計された墓の形態である。ソウル市で開発され、「韓国型家族墓地」と称して分譲されている。

文献

(日本語文献)

- 赤田光男 (1975) 「朝鮮の墓地と祖先祭祀」 森浩一編『墓地』社会思想社、pp.199-217.
- 朝倉敏夫 (1993) 「韓国の墓をめぐる問題」 藤井正雄他編『家族と墓』早稲田大学出版部、pp.63-80.
- 嶋陸典彦 (1987) 「氏族制度と門中組織」 伊藤亜人他編『現代社会人類学 I 親族と社会の構造』東京大学出版会、pp.3-23.
- 未成道男 (1985) 「東浦の祖先祭祀—韓国漁村調査報告—」『聖心女子大学論叢』第 65 巻、pp.5-96.
- ジャネリ.R・任敦姫著、樋口淳他訳 (1993) 『祖先祭祀と韓国社会』第一書房
- 崔吉城著、重松真由美訳 (1992) 『韓国の祖先崇拜』御茶の水書房
- 崔仁宅 (1998) 「伝統社会」 梅田博之他編『ハンドブック韓国入門—ことばと文化』東方書店、pp.214-229.
- フリードマン、M 著、田村克己・瀬川昌久訳 (1985) 『中国の宗族と社会』弘文堂

- フリードマン、M 著、末成道男・西澤治彦・小熊誠訳（1990）『東南中国の宗族組織』弘文堂
- 本田洋（1993）「墓を媒介とした祖先の〈追慕〉—韓国西南部—農村におけるサンイルの事例から—」『民族学研究』58 卷 2 号、pp.142—164.
- 村山智順（1931）『朝鮮の風水』朝鮮総督府（復刻版 1972、国書刊行会）

（韓国語文献）

- 張哲秀（1995）『韓國의 (의) 冠婚喪祭』集文堂
- 서울특별시（1999a）『「장묘문화에 대한 시민여론조사」결과 및 정책적 시사점』(ソウル特別市『「葬墓文化に対する市民世論調査」結果および政策的示唆点』)
- 서울특별시（1999b）『'99 서울시립 화장장 이용자 설문조사 분석결과 및 정책적 시사점』서울특별시 (ソウル特別市『'99 ソウル市立火葬場利用者設問調査分析結果および政策的示唆点』)
- 連合通信（1991）『멍드는 금수강산—墓地제도는 고치야 한다』連合通信 (『傷つく錦繡江山—墓地制度は正さなければならない』)
- 한국장묘연구회（1997）『한국장묘』제 3 권 (韓國葬墓研究会『韓國葬墓』第 3 卷)
- 한국장묘연구회（1998）『한국장묘』제 4 권 (韓國葬墓研究会『韓國葬墓』第 4 卷)